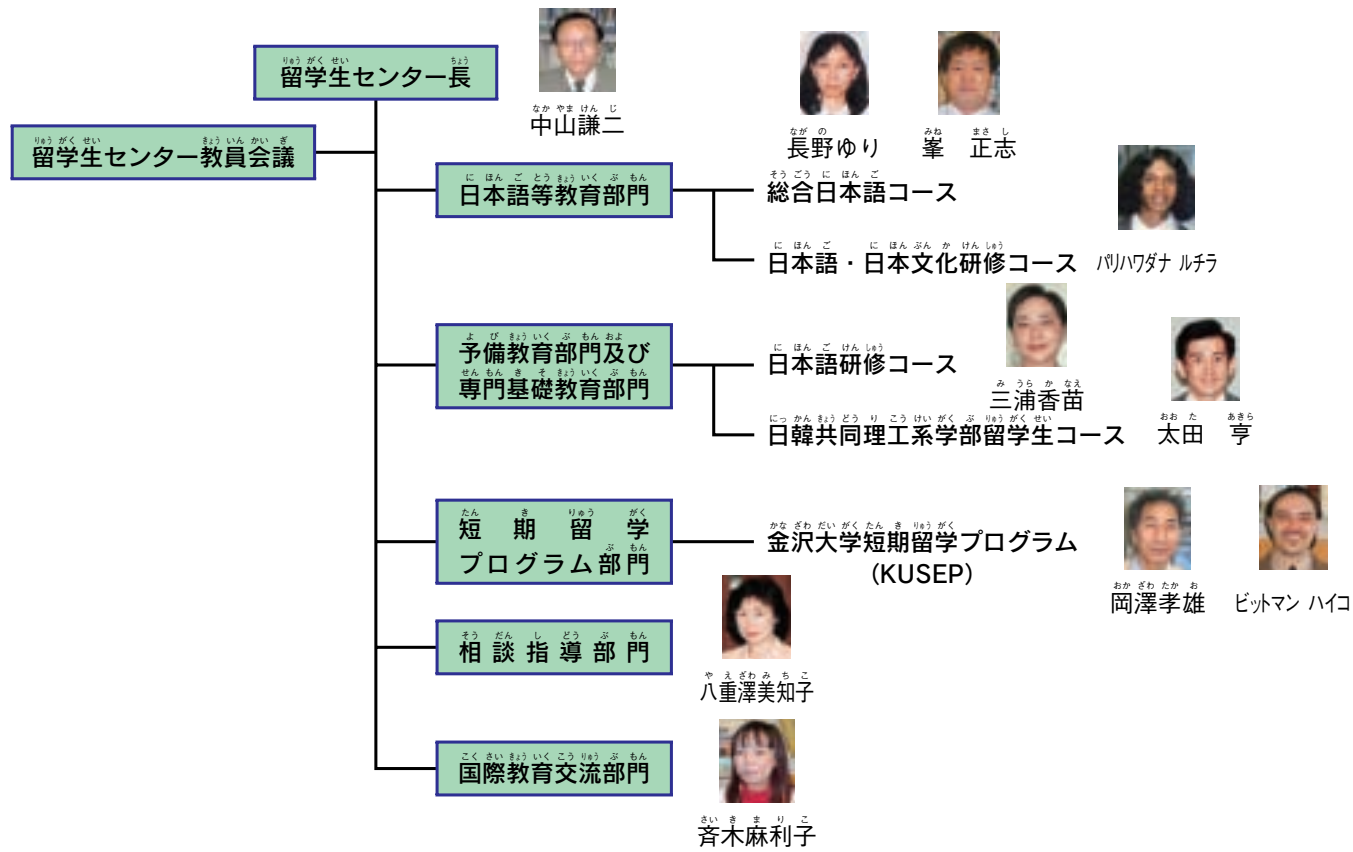
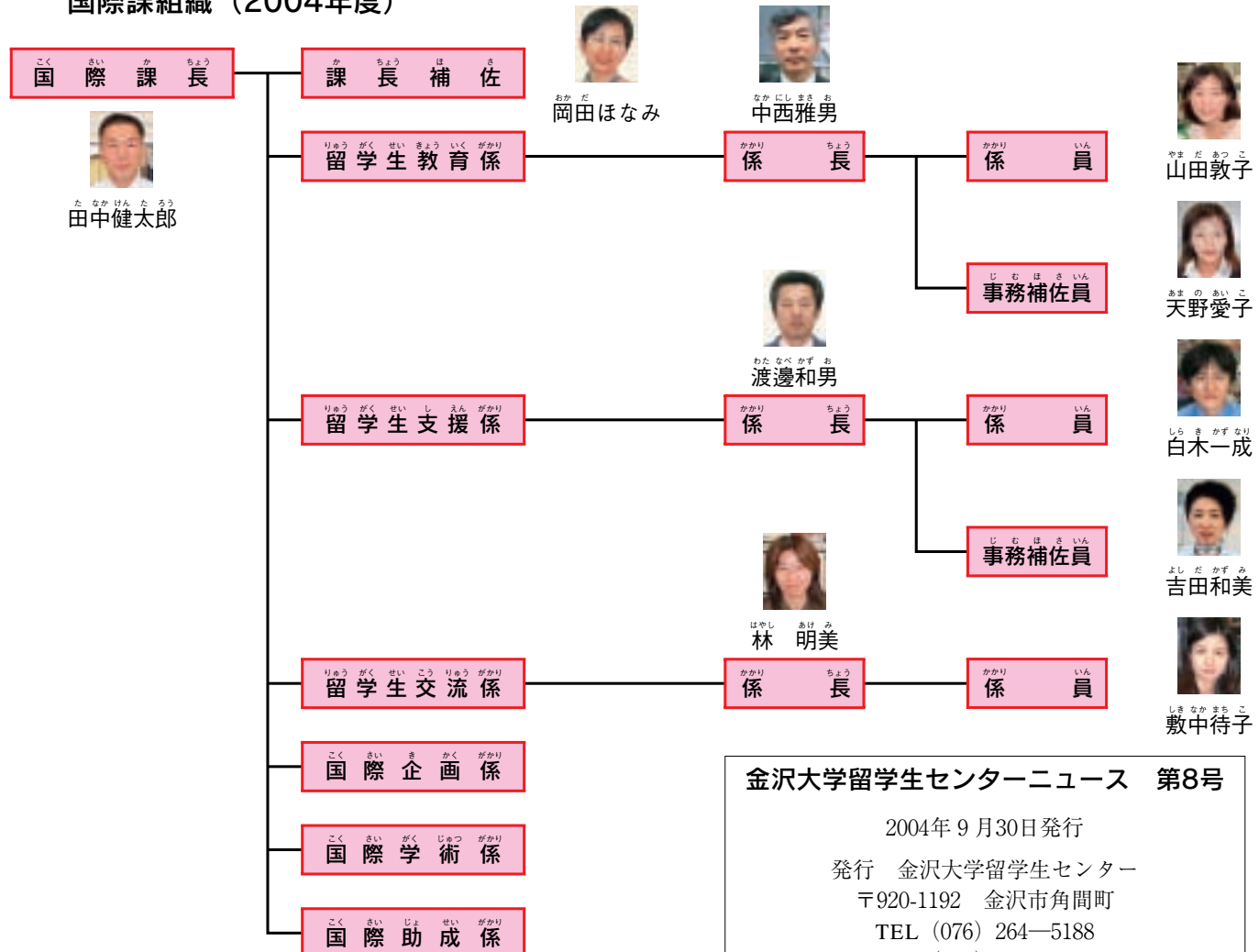


留学生センター組織 (2004年度)



国際課組織 (2004年度)



金沢大学留学生センターニュース 第8号
 2004年9月30日発行
 発行 金沢大学留学生センター
 〒920-1192 金沢市角間町
 TEL (076) 264-5188
 FAX (076) 234-4043
 s-ryuukikaku@ad.kanazawa-u.ac.jp



International Student Center News

金沢大学
留学生センターニュース



vol. 8
September 2004





大学における留学生の役割

中山 謙二 (留学生センター長)

金沢大学にきている留学生の目的はいろいろあると思います。専門の勉強、学位取得、日本語の勉強、日本の風土習慣や文化の理解など。その中で全ての留学生に共通していることは、外国で生活し、外国の大学で学んでいることだと思います。異国の地での生活や勉強は経済的な問題、習慣の違いなど、多くの困難を伴います。そのために、留学生センター、国際課をはじめ多くの教職員が留学生の支援を行っています。しかし、留学生は支援を一方的に受けるのではなく、留学生の立場から大学に貢献できることもいろいろあると思います。

国際交流は日本にいる留学生が「日本」を理解するだけではなく、日本人学生が留学生を通してその国、さらに世界を理解することを目指しています。しかし一方で、「外国人留学生と日本人学生の交流が少ない」という声も聞きます。「交流」という言葉の意味は広く、人によって理解が異なります。しかし、大切なことは「相互理解」ではないでしょうか。また、交流を通して「信頼できる友人」ができることも大切です。交流の形態はいろいろありますが、一方的な理解、うわべだけの理解、日常的感觉から離れた理解では、真の国際交流は難しいでしょう。

実りある「国際交流」を実現するためにはどうしたらいいのでしょうか？もっとも大切なことは、異文化理解への関心の高さではないでしょうか。留学生、特に、日本文化を学ぶ短期留学生はその関心が高いと思います。一方、専門を学ぶ留学生や日本人学生は一部の学生を除いて全般的に関心が低いようです。ある意味で、これが大きな問題になっています。

真の「国際交流」は他人がお膳立てをしてできるものではありません。大学においては、留学生と日本人学生の間にそのような気運が高まるのが大切です。では、どのようにして気運を高めたらいいのでしょうか？これは、大変難しい問題ですが、私はここで「留学生の役割」を考えてみました。それは、「留学生が考え、オーガナイズする交流の場を作る」ということです。「どのような話題、活動にしたら日本人学生が参加してくれるか？相互交流ができるか？」、さらに、「留学生も感心をもてるか？参加しやすいか？」ということ留学生自身が考え、かつ実行することです。また、その活動もできるだけ日常の活動に根ざしたものがいいのではないのでしょうか。留学生は自分の勉強や研究等で忙しいと思いますが、Where there is a will, there is a way です。留学生の皆さん、日本人学生の中に分け入りましょう。

大村先生へのインタビュー

大村明雄 理事 (研究・国際担当)・副学長 [専門は地質学、主な研究は珊瑚礁]

日時：2004年9月8日(水) 10:00~11:30

インタビュアー：金 香仙 (文学部人間学科1年) 中国

同席 ビットマン ハイコ (留学生センター KUSEP 担当教員) ドイツ

同席 宮崎 悦子 (経済学部経済学科教員) 日本

金 日本の国レベルでの国際交流事業についてどう
お考えですか？

A 今、日本は国として出来るだけ多くの留学生を
招聘するという事業をしています。

留学生受け入れ10万人計画は達成されましたが、受
け入れ計画の目的が明確ではありませんでした。本学

について言えば、日本人学生の国際感覚を養う事が、留学生受け入れの目的ではないかと思う
のです。留学生を教育するだけではなく、日本人学生への影響、すなわち国際感覚を養うとい
うことも必要だろうと思います。たとえば、私の研究室にはフィリピンからの留学生が2人
います。この留学生たちを受け入れてよかった点は、日本人ゼミ生の英語がうまくなったこと
です。学生同士では、英語と日本語を混ぜたような新しい言葉を使ってコミュニケーションを
とっています。シャイな日本人学生のコミュニケーション力がアップしました。

留学生を受け入れることによって、そこに新しい文化が伝わるというエピソードとして、私
がアメリカに留学したときのお話をしたいと思います。私が入った研究室にはスポンジしかあ
りませんでした。しかし、私が雑巾を使ったら便利だと広まり、私が帰国する時には使い古し
たタオルを雑巾として残してきました。

私は講義を通じておつき合いするより、ゼミ・研究を通じた人間同士の密接なつきあいを重
視しています。

金 大学の国際交流について、どうお考えですか？

A 現在は協定校(37大学間、39部局間)による交流が中心です。しかし、交流が活発な大学
とそうではないところがあります。そこで、重点交流校を設定したいと考えています。研究上
の交流と学生の教育のための交流の2つの面があります。部局間協定では研究者交流が多いで
すね。

私の若い頃の日本は、欧米の研究から学ぶことを主とした交流でしたが、20~30年前からは、



欧米から招聘されるようになったし、向こうからも講演に来てくれるようになりました。国際化が一方通行から双方向となったわけです。以前は留学生課も国際課もなかったので、残念ながら、プライベートなレベルの交流でした。

大学全体として目指すものは、環日本海域を中心とした南から東アジアにかけての交流を重視しています。研究や人間の交流はローカルからリージョナルへ、そしてグローバルへと拡大していきたいものです。今はそれが、着々と進んでいるように思います。

金 金沢大学では日本人学生の留学は少ないですね。

A なかなか増えませんね。経済的な支援が国としては少ないです。それへの対応として、大学が方策を持って対策を立てなければなりません。国策としての奨学金はまれです。本学では後援会の寄付金から少しは支援していますが、日本人の派遣留学生の数が少ないのが一番の問題です。また、研究者派遣についても、文科省や学振の派遣制度はありますが、学生のためにそのようなシステムが非常に少ないことも問題です。お金だけではないと思いますが、補助は必要でしょう。教育の国際化のためには、日本人と外国人がお互いを知り合う機会を増やしたいと思います。

金 先生はなぜ金沢大学を選びましたか？また、金沢大学の良い所は何ですか？

A 私は人生の大半を金沢大学で過ごしました。私は金沢生まれの金沢育ち。金沢大学以外には行けなかった理由があったからです。しかし、理学部の分野に夢を持ってました。金沢大学以外でトータル6年を過ごしました。4年は海外で研究し、2年はいろんな所での野外調査でした。金沢大学の良いところは、静かな、閉鎖されたこの場所です。都会から遠いので、実験に必要な時間を静かにコツコツと積み上げていくことが出来ました。

私は、昭和34年に12回生として本学に入学しました。当時は大学も貧しくて、理学部5学科で研究機器をお互いに使いあいました。しかし、かえてこのことが学科に壁をなくしました。今で言う「学際」が既に行われていた訳ですね。大きな大学にはない特徴であったと思います。でも反面、研究仲間がいないので、個人で努力しなければなりません。それはそれでユニークな研究が出来る訳ですね。

研究実績ができ、学外のグループに加わる事が出来ると、自然と海外からも呼ばれます。まず、自分一人のアクティビティが大切ですから、留学生にも日本人の仲間に入るように勧めます。得る所があるはずですよ。

金 自分の学生時代と比べて、今の学生・留学生について思うことはなんですか？

A 今の学生に一番不満を感じるの、社会の事を考えない事、自分の事しか考えていない事です。そして、議論する習慣が薄れています。社会に関心を持ち、議論することが非常に重要です。また、本を読む事が少ない。ベストセラーだけではなく、昔は大学生である以上は必読書がありました。だから、分からなくても難しい本をめくった。「読んでない」なんて、みっともなく言えなかったです。

仲間どうしの会話も、かつては「あれ読んだ？」から、今は「あれ見た？」に変わり、最近

なに
は何でしょうか？

金 留学生に何か望むことはありますか？

A 議論出来るように、コミュニケーションがとれるように、日本人を教育してほしいですね。
日本人学生は、学会で発表しても議論しないで一過性で終わってしまうから深まりません。議論する事はプライド、大学生は何かすることは責任です。人生、社会、政治についての議論がない。

くに かえ ころ にほんじん ゆうじん つく れんらく と つづ たが にちじうせいかつ
国へ帰る頃には日本人の友人を作って、そして連絡を取り続けてほしい。お互いに日常生活
なか りかい にんげんせい たが ひ だ せる つき あ ぜ ひ にほんじん おも
の中で理解し、人間性がお互いに引き出せる付き合いを、是非日本人としてほしいと思います。
ちが なに はっけん で き
違う何かが発見出来るでしょう。

金 先生が、海外生活で楽しかったことは何ですか？

A 楽しかったことはたくさんありますね。

北京には学会で2回行きました。ホテルから会場まで1時間半歩きましたが、歩く途中が楽しい。
北京では人々の歩くスピードがものすごく速い。
一目散に歩く人が多いですね。



外国人の友達を作るときには、何でも受け入れ、許すような気持ちで、自分の習慣だけに従わない

ことが、大事なことではないかと思えます。外国の方ですから、考え方が違うのは当たり前です。

金 外国での生活で感動したことは何ですか？

A 私のいた大学では、学生の顔が明るいこと、先生もアクティブで、仕事に対して集中力が違うことで、私自身考え方を考えさせられました。講義の時には、学生たちの目が違って、取り組みに対する真剣さが日本とは違いました。

金 今日はお時間をとっていただき、ありがとうございました。先生の体験もふくめていろいろなお話が聞けてとてもよかったです。

国際教育交流部門

UMAP をご存知ですか？

金沢大学留学生センターでは、留学を希望する日本人学生を支援するために、国際課、外国語教育研究センターと連携することにより、いろいろな取り組みを行っています。中でも、留学情報の提供は、大切な仕事の一つなのですが、ここでは、UMAP (University Mobility in Asia and Pacific ; アジア太平洋大学交流機構) という学術交流組織が提供するアメリカの大学への留学制度についてご紹介します。

UMAP とは、1991年に発足したアジア太平洋地域の高等教育機関等が構成する任意団体です。その目的は、アジア太平洋地域の高等教育機関に所属する学生や教職員の交流を促進することによって、お互いの国、文化、経済、社会制度などへの理解を深めることにあり、現在のところ、日本、アメリカ、韓国、中国など、30の国や地域の高等教育機関がメンバーとなっています。

2003年度には、日米のUMAP委員会が、学生の受け入れ・派遣のための協定を締結しています。日本からは、金沢大学を含む39の国公私立大学が参加メンバーとして、名乗りをあげています。アメリカからはユタ大学、ミネソタ州立大学を始めとする21校が参加を表明しています。この協定は、日米UMAP参加大学間の授業料不徴収と厳密な単位互換制度を主な特徴としており、これに基づいた留学は、学生にとって大変魅力的なものだと思います。

金沢大学も、2005年度より、U.S.UMAP参加大学への派遣留学をスタートさせることになりました。2005年度派遣分の募集学生数は、2名から5名を予定しています。また、派遣学生の募集・選抜は、協定交流校への派遣学生募集の場合と同じ日程及びメソッドで行う予定です。

UMAP 及び U.S.UMAP 参加大学への派遣留学に関する詳しい情報を知りたい人は、ぜひ、齊木 (saiki@kenroku.kanazawa-u.ac.jp, 264-5527) までご連絡ください。また、UMAP のウェブページもご参照ください。アドレスは、次の通りです。http://econgeog.misc.hit-u.ac.jp/umapjp/

2004年度開講「英語 A」クラス

金沢大学では、入学時までに英語学習の経験のない学生を主な対象として、初級英語クラス「英語 A」を開講しています。2004年度前期の受講生は、文学部の金香仙さんと肖云さん、経済学部の劉美蘭さん、教育学部の趙俊成君の4名の1年生と、教育学部3年生の包玉梅さん、教育学部研究生のボルさんの計6名で、筆者が担当教員を務めています。

2004年度の「英語 A」のシラバスは、昨年度「金沢大学留学生のための英語教育改善プロジェクト

エクト」として受託した学長裁量経費の補助のもと、立案したものです。毎週2回の授業と長期休暇中の特別授業及び課題を通して、基本的な文法項目や会話表現を1年間でマスターし、英語圏の国々の歴史、文化、習慣、さらには、世界における英語の位置づけについても見識を深める、というのがこの授業の目的なのですが、ハードなタスクにもかかわらず、受講生たちは、和気あいあいとした雰囲気をつくり出し、お互い助け合いながら、めきめき力をつけています。そのせいか、担当教員の筆者は、前期には、毎回の授業が待ち遠しくて仕方ありませんでした。

しかし、これには、もう一つの要因である「助っ人の存在」が欠かせません。実は、筆者が担当する教育学部の授業の受講生でもある、教育学部3年生の北川貴陽子さん、澀谷順子さん、山崎かおりさんの3名の「教師のたまご」たちが、「英語A」の授業に出席し、優しく、熱心に授業をボランティアでサポートしてくれたのです。自分の学生の頼もしい姿を直接目することほど、教員にとって嬉しいものはありません。さらに、彼女たちのおかげで、受講生たちも、リラックスして疑問を解決し、正しい知識を定着させることができたのだと思います（担当の先生よりも、先輩や友達の方が、聞きやすい場合、多いですよ…）。

英語は、今や、研究や学習の成果を上げるための道具であり、大学や大学院に在籍するほとんどの人にとって、必要不可欠なものです。しかし、出身国や出身地域の教育制度上、一部の留学生が、英語という道具に磨きをかけるのに、特別な援助を必要としているのが、日本の大学における現状です。「英語A」は、そのような学生を主な対象とする授業科目なのですが、金沢大学の留学生受け入れにますます拍車がかかっている中、この種の授業科目の必要性も、確実に高まっていくと予想されます。筆者は、留学生センターの教員としての立場から、金沢大学における英語教育カリキュラムのなおいっそうの整備のため、今後も尽力していきたいと思っております。

国際教育交流部門：齊木麻利子



左より趙成俊くん、劉美蘭さん、金香仙さん、肖云さん



がっきまつしけん
学期末試験

につかんきょうどうり こうけいがく ぶりゆうがくせい
日韓共同理工系学部留学生コース (通称：日韓プログラム)

だい きせい そつぎょう
「第1期生がいよいよ卒業」

につかん ねん だい きせい むか いっぼう だい きせい めい つい らいはるそつ
日韓プログラムも2004年で第5期生を迎えます。その一方で、第1期生の3名は遂に来春卒
ぎょう むか こんかい さいしゅうがくねん むか きせい げんざいけんきゅう
業を迎えようとしています。今回は、最終学年を迎えた1期生に、現在研究しているテーマ、
かなざわ ねんかん せいかつ そつぎょうご かつ
金沢での4年間の生活、そして卒業後のことについて語ってもらいました。

高 光必 (コー・クアンピル) 君 土木建設工学科 観光地・済州島出身。

そつぎょうけんきゅう テーマは、なな おし どうろ せいび じぎょう 事例とした、じゅうみんさん かがた しえん
卒業研究のテーマは、七尾市の道路整備事業を事例とした、住民参加型デザイン支援システ
ム かいほつ せんもん べんきょう ねんせい いま ほん ぶん ちよくせつけんきゅう
ムの開発です。専門の勉強は(4年生になった)今が一番できていると思います。直接研究に
と く せんもん ちしき み ちか じはつてき べんきょう おも
取り組むことにより、専門の知識をもっと身近にそして自発的に勉強ができていいと思います。
かなざわ せいかつ りょう せいかつ みじか だいがく こうつうかんきょう わる ひと
金沢での生活は、寮の生活が短すぎたり、大学の交通環境が悪すぎたりはしましたが、人はい
いし、空気もいいし、その辺はよかったです。卒業後はまず兵役を終えて、その後で自
ぶん ぐうき へん おも そつぎょうご へいえき お あと じ
分がやりたいものを探したいと思います。

申 東美 (シン・ドンミ) さん 物質化学工学科
『冬のソナタ』の舞台・春川出身。

こうぶん しけんきゅうしつ しょぞく そつぎょうけんきゅう
高分子研究室に所属しています。卒業研究では、
こうぶん し か ごうぶつしつ つく ようばい はんのう しら なに
高分子化合物質を作って溶媒との反応を調べ、何
おうよう けんきゅう ねんせい
に应用できるかを研究しています。1・2年生の
ときはレポートを書くことで日本語の勉強ができたし、3年生になると専門の勉強もできるよう
な かなざわ ねんはん
なってよかったです。金沢ではいっぱい思い出ができました。1年半ほどアカペラのサークル
はい かんこくご おし し けん いらい つうやく しごと いしかわけん
に入りました。また、韓国語を教えたり、市や県からの依頼で通訳の仕事をして石川県のいろ
いろなところへ行ったりもできました。卒業後は就職しようかなあと考えていましたが、今は
もう少 べんきょう おも だいがくいんしんがくきぼう か
う少し勉強したほうがいいのかと思うようになり、大学院進学希望に変わりました。



李 丞才 (イ・スンジェ) 君 電気電子システム工学科 空の玄関口・仁川出身。

そつぎょうけんきゅう きょうよう しこうせい けんとう けん
卒業研究では、共用スピーカーボックスによる指向性アレースピーカーの検討をテーマに研
究しています。だいがくせいかつ はい ともだち せいかつめん
究して。大学生活では、サークルに入って友達をつくることができました。また生活面
では、きんじょ ひと やさ もんだい そつぎょうご へいえき もん
近所の人たちが優しくしていただいて問題ありませんでした。卒業後は、まず兵役の問
だい かいけつ だいがくいん すず しゃかい で き おも
題を解決してから大学院に進むか、社会に出るかを決めたいと思います。

につかん たんとう おおた あきら
日韓プログラム担当：太田 亨

大学院予備教育 (日本語研修コース)

VOTAK 活動：日本・世界事情

VOTAK というのは Volunteer Tutors Association of Kanazawa University の略です。2003年度から参加している大熊美佳さんに、VOTAK の紹介をしてもらいます。



(第17期 VOTAK 東茶屋街散策2003年)

VOTAK には、日本語研修コースの留学生と日本人学生が、週一回の活動に参加しています。留学生の授業の一環として位置づけられている VOTAK の活動ですが、日本人学生は希望者が参加します。参加している日本人学生の専門分野は様々で、オリエンテーションを受けて趣旨に賛同した学生なら誰でも参加でき、現在のところ教育学部人間環境課程日本語・日本文化教育コースの学生が約半数を占めています。

主な活動は、日本の紹介やゲーム、留学生による「私の国」発表、個別に行う自由会話などです。また、ハイキングやバス旅行などの教室外活動も行っています。これらの活動を通じて、お互いに日本の事情・世界の事情を学んでいます。日本人の学生は留学生を通じて異なった価値観を知ることができ、そのことによって「日本の文化」についてより客観的に考えることができるようになっていきます。また、留学生も習った日本語を使って会話する中で、日本人学生を通じて異なった考え方や生き方を知ることができます。異文化で育った者同士が共に学ぶことによって、異なった価値観を知り、お互いに違いを認めながら、どううまく付き合っていくのかについて考えることができます。

VOTAK の活動は、将来的に国際的な活動をしようとしている学生にはよい経験になります。とりわけ日本語教育関係の仕事に就きたいと考えている学生にとって、在学中から日本語学習者（留学生）に直接触れることができるのは、他では得がたい経験になっています。例えば、

留学生が日本語を発音する際にその母語からくる影響は、テキストを読めば書いてありますが、実際に留学生とのやり取りの中で直接見聞きすることは、誤用を知る上でとても参考になります。また、参加学生が比較的少人数なこともあって、VOTAKを指導している先生から各々具体的なアドバイスを受けることができます。講義やゼミとは異なったやや気楽な雰囲気の中で、留学生と学びつつ、日本語教授法の授業で習ったことの実践もできるので、留学生の日本語上達を支援しながら、自分自身の勉強にもなっています。

活動時間の前半は、毎回学生が交代で日本紹介などの発表をしますが、後半は留学生と自由に会話しています。話題はお互いの近況、家族のこと、日常生活で困ったこと、日本語の勉強のことなど様々です。

また、研修コースの留学生のほとんどが日本人学生より年上ですから、彼らとの関わりは、異文化間交流としてはもちろんのこと、異世代間交流としてもよい刺激を受けています。もっとも、初級日本語を始めたばかりの最初のころは、日本語だけではほとんど会話が成り立たず、お互いストレスを感じるのですが、日本語研修コースの留学生は週5日、1日4コマと集中的に日本語を勉強しているため、あっという間にいろいろなやりとりができるようになります。

しかし、だからといって私たち日本人学生も留学生の日本語習得に頼るだけではなく、どう話せば理解してもらいやすいかを考え、伝わる日本語（初級で学習する文型・語彙）を意識して使うよう努力しています。もちろん、努力してもうまくコントロールできず、つい難しい表現を使ってしまうことも多いですが、留学生の反応を見ながら言いかえを行ったり、例を出したりして、理解してもらえよう試行錯誤を繰り返しています。

このように、伝わりにくいときに相手に寄り添って語るという姿勢・技術は、異文化間コミュニケーションの基本であり、留学生と日本人学生が共に学ぶVOTAK活動は、こうした面でお互いを鍛えてくれます。

おおくまみ か かなざわだいがくきょういがかぶ かもくとうりしゅうせい
大熊美佳（金沢大学教育学部科目等履修生）



だい き たなばなかな ねん
(第18期 VOTAK 七夕飾り2004年)

日本語・日本文化研修コース

大学の枠を超えた教育交流を目指して

日本語・日本文化研修コースは日本の良き理解者の育成を目的に日本の国費留学制度の一環として1979年に設立されたものです。母国大学において、日本語または日本文化に関わる学部学科に所属する学部留学生を対象にした1年間の教育プログラムです。大使館推薦及び大学推薦により選抜された約370名の日本語・日本文化研修留学生（以下、「日研生」）は全国53の受け入れ大学に分散しながら、日本語及び日本文化についての専門教育を受けます。金沢大学でも留学生センターが設立した1995年以来日研生を受け入れていて、2004年10月に第10期を迎えます。



金沢大学の日研生プログラムは日本語、日本文化及び日本研究という3本の柱で形成されていますが、日本文化に特化した教育を実施することで特色を出しています。日本文化教育としては、日本語、日本文学、法学、経済学、国際関係などの様々な専攻の学生の多様なニーズに応えるために、文学部、経済学部、法学部、教育学部、理学部、外国語教育研究センターなどの学内教員の心暖かなご協力のもと、現代社会の諸局面を具体的な切り口にした幅広い教育を実施しています。更に、地域性を生かした教育を実施するために、伝統工芸・芸能の職人・芸術家を非常勤講師として招き、加賀友禅、九谷焼、山中塗、輪島塗を初めとする約20種類の日本文化体験を日本文化体験実習という授業科目として実施しています。第9期(2003年10月～2004年9月)におけるこの日本文化教育の協力教員は学内教員31名、学外の専門家22名と53名にも上り、学内外を結ぶ日本文化の専門家の小さなネットワークが構築されつつあります。

上記の、金沢が世界に誇る伝統文化を紹介するプログラムは伝統文化界のご理解と惜しみないご協力なしには決して成り立ちません。技や技術を極めるために一生を捧げてきた職人・芸術家の人生観に触れることで、学生の人間としての成長を促すことができると思われます。

里親プログラムも同様に大学の枠を超え、地域のご理解の下、実施している日研生プログラムの一環です。里親との日常的なつきあひを通して、日研生は飾りや誇張のない日常の日本を

まな ざとおや あた ぎずな ねんかん じ かん わく こ けいぞく にっけんせいきういく
学びます。里親との暖かい絆は1年間という時間の枠を超え、継続するもので、日研究生教育を
ゆた 豊かにしてくれます。

に ほんけんきゅう かなざわだいがくにっけんせいきういく ひと ほしら にっけんせい に ほん えら
日本研究は金沢大学日研究生教育のもう一つの柱です。日研究生は日本についてのテーマを選び、
ねんかん わた けんきゅう おこな しゅうりょう じ せい か ほつぷう
1年間に渡って研究を行い、プログラム終了時にその成果を発表し、レポートとしてまとめて
ていしつ ちゅうさ じっしゅう か もく けんきゅうほうほうろん まな にほんじんがくせい ごうどうちゅう さけんきゅう とお
提出します。調査実習科目で研究方法論を学び、日本人学生との合同調査研究を通して、その
じっせん しゅうとく ころみ にっけんせい けんきゅう かれ にほん たい かんしん じ し じゅうよう て が
実践・習得を試みます。日研究生の研究テーマは彼らの日本に対する関心事を知る重要な手掛
りで、たいへんきょうみ ぶか にほん あんぜん ほしゅう もうてん かんてん み
大変興味深いです。「日本の安全保障の盲点」もあれば、「モダリティの観点から見た『も
のだ』」もあり、「和菓子」もあります。学生が提出した研究レポートはレポート集として編集
され、にっけんせい う い だいがく はい ふ ぜんこく おく されてくるレポート集は各大学
にっけんせい がくりよく かんしん じ し きちゅう しりょう
の日研究生の学力や関心事などを知る貴重な資料となります。

だいい き にっけんせい けんきゅうほつぷうかい た だいがく きょうゆう あら ころみ おこな がつ か おこな
第9期では日研究生の研究発表会を他大学と共有する新たな試みを行いました。8月6日に行
われた こうとうけんきゅうほつぷうかい はっしん おおさかがいこく ご だいがく まな にっけんせいおよ にっけんせいたんとうきょういん さん
口頭研究発表会をSCS発信し、大阪外国語大学で学ぶ日研究生及び日研究生担当教員に参
か しつ ぎ おうとう じ かん おおさかがいこく ご だいがく にっけんせい しつもん えいせい
加していただきました。質疑応答の時間に大阪外国語大学の日研究生に質問してもらい、衛星を
かい けんきゅうほつぷうかい きょうゆう だいがく わく こ ころみ
介して研究発表会を共有することができました。このような大学の枠を超えた試みによって、
にっけんせいどうし しげき あ ちてききょうゆう じつげん とお ぜんこく にっけんせいきういく さら たか
日研究生同士が刺激し合い、知的共有の実現を通して、全国の日研究生教育のレベルを更に高めて
い か のう おも
行くことが可能になると思われます。

がくないのリソース およ ちいさき う い こう きんしつ けつ い
学内のリソース及び地域リソースにおいて、53の受け入れ校は均質であるとは決して言えま
せん。それぞれの長所を共有しながら、補い合っていけば、せいかい れい み ぶん かきょういく
プログラムが実現し、世界の舞台で活躍できる能力を有した日本のよき理解者を育成し、世界に輩
しゅつ か のう おも
出することが可能になると思われます。

がくないきょうりょくたいせい せい び わく と きょういく じっし ちいさききょうりょくたいせい とお
学内協力体制の整備によってセンターの枠に止まらない教育を実施し、地域協力体制を通し
だいがく わく と きょういく じっし しこうさくご かさ あら だいがく
て大学の枠に捕らわれない教育を実施するために試行錯誤を重ねてきました。新たに、他大学
との共有を通して大学・所在地の枠を超える次の段階に向けて第一歩を踏み出すことができま
した。こくざいり かいきょういく ちいさきこうりゅう にっけんせい さん か がくない にほんじんがくせい ごうどうちゅう さ ころりゅう
国際理解教育や地域交流への日研究生の参加、学内の日本人学生との合同調査・交流など
とお しゅうき ぼ にっけんせいかわ ほっしん じつげん いっぽうつうこうてき そうほうこうてき
を通して、小規模でありながら日研究生側からの発信も実現し、一方通行的でない、双方向的な
きょういくこうりゅう じょじょ はってん
教育交流へと徐々に発展しつつあります。



にほんご にほんぶん かけんしゅう たんとく
日本語・日本文化研修コース担当

パリハワダナ ルチラ

かなざわ だいがく たん きりゅうがく 金沢大学短期留学プログラム (KUSEP)

わたし りゅうがくたいけん 私の留学体験



朴 丁河 (パク ジョンハ)

かんこく ぶさんこくりつだいがく
韓国、釜山国立大学

わたし ねん がつ かなざわだいがく りゅうがくせい かなざわ き
私は2003年10月から、金沢大学の KUSEP というプログラムの留学生として金沢に来ました。
KUSEP は日本語も習えるし、日本の社会や文化などを英語で勉強することができるプログラム
です。日本のことに興味ある学生たちがいろいろな国々から参加していました。私は最初あ
まり日本語が分からなかったのが心配でしたが、KUSEPのおかげで、少しずつ話せるよう
になり、その過程もとても楽しかったです。

KUSEP の最もよかった点は、自然に日本語と日本のことを楽しく勉強することができる
ところだと思います。日本語のクラスはプレイメントテストを通じて、AクラスからFク
ラスまで自分のレベルにあったクラスで勉強することができます。クラスによってスピーチやド
ラマなどのさまざまな内容があって、とても勉強になりました。ほかにも日本のことがもっと
深く理解できるよういろいろな授業もあります。日本文化体験という授業がありましたが、
茶道、金箔、生け花、着物などの日本文化をただ見るだけではなく、直接体験する授業なので、
もっと日本の文化を理解することができました。金沢は古い歴史のある都市で、さまざまな日
本の伝統文化をよく体験でき、とてもよかったと思います。武道の授業も運動が苦手な私には
大変でしたが、今はとてもいい思い出になりました。日本人の学生と一緒に授業を受けること
ができる討論スタイルの授業も楽しかったです。KUSEP の学生は専攻がみんな違いますから、
学生のためにぶんがくからしぜんかから自然科学までさまざまな分野の授業があるのもいいところ
です。授業のほかにもホームステイやパーティーなどいろいろな行事があるので積極的に参加すれば、いい思
い出ができると思います。

KUSEP プログラムが終わりに近づくと、とても名残惜しくなりました。しかしたくさん
のことに挑戦し、勉強し、体験した一年間は、今からの私の人生にも役に立つはず
です。韓国に帰ってからも日本語の勉強を続けたいと思っています。

最後にいつも私たちの面倒を見てくださいました岡沢先生やビットマン先生、多くの先生たち、
とても親切に対応してくれた留学生センターの関係者の皆様にもどうもありがとうございました
と伝えたいです。

Rappa, Penny

アメリカ

ニューヨーク州立大学

バッファロー校



日本に来る前に、私は日本の文化や習慣や生活について何も知りませんでした。大学に入ってから2年間ほど日本語を勉強して、日本語にとっても興味を持ったのが日本に留学したきっかけです。金沢に来てからは、来る前に考えていた以上にいろいろなことが勉強できました。そして、自分について、自分の国や世界についての考えや意見が変わりました。

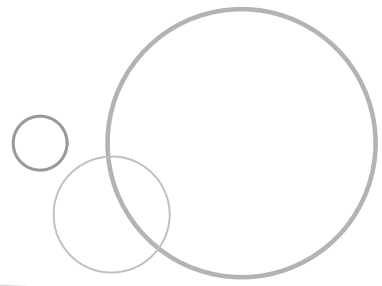
日本に来る前は自分の日本語力に自信がなくて、アメリカにいる日本語の先生に挨拶することが出来る程度でした。金沢に来て初めて受けた授業は「日本語C1」というクラスでした。この授業の目的は日本語で話す練習をすることで、そこで色々な国から来た人と会話をしました。自信がつくにつれて、日本語がうまく話せるようになってきました。次の学期にはC2というクラスに進みました。漢字が多く教科書を読めなかったので、本当に難しかったです。一方で、日本語についての興味がさらに湧いてきて、一生懸命勉強しました。特に漢字が大好きになりました。

運良く、岡沢先生の日本の文化体験の授業を受けることができました。中でも一番良かった体験は金箔貼りでした。難しかったけれども、本当に面白かったです。茶道体験も楽しく、有名な大樋年雄先生とお話ししながら、茶碗を作ることができました。そのほか、生け花をしたり、和紙をすいたりしました。毎週金曜日には、岡沢先生は私たちを太鼓の練習に連れて行ってくれました。時々祭りに参加し、太鼓をたたきました。非常によい思い出になりました。

ビットマン先生の杖道の授業と空手道の授業も受けました。初めて練習したときは大変難しかったが、毎週何回も練習するうちに、身体もだんだん強くなりました。ビットマン先生と岡沢先生には本当にお世話になりました。

留学生とも日本人とも友達になることができました。特別な日にはよく一緒にお祝いしました。たとえば、ハロウィンに国際パーティーがあって、皆で楽しみました。日本人の友達は日本語で話すので、初めて遊びに行った時は友達の話がはっきりと分らなくて、とても難しく感じました。でも慣れてくると、どんどん分かるようになりました。友達の話から、たくさん言葉や習うこともできました。今、感謝の気持ちでいっぱいです。日本で経験したことは一生忘れられないでしょう。

相談指導部門



自分の運転免許をチェックして下さい！

また、運転する際には必ず保険に加入してください!!!

最近の質問の中に、運転免許に関するものがありましたので、ここでまとめてお知らせいたします。

その1. 出身国で既に国際運転免許に書き換えてから来日した留学生への注意

運転を始める前に、日本国内で使う国際運転免許証で運転出来る乗り物は何かを確認して下さい。出身国で運転免許を切り替える時にもらった書類を読めば、すぐ分かります。日本で運転出来るのは、自動車だけに限られるのか、それ以外に二輪の自動車も含むのかなど、書類をよく読んで確かめてから運転してください。自分で勝手な解釈を行ったり、他の留学生の行動を見て判断してはいけません。

また、国際免許証は使える期間が限られていますので、注意が必要です。

その2. 出身国で既に運転免許を持っていて、

日本の運転免許への書き換えを希望する留学生への注意

出身国での運転免許が書き換え可能であるのかどうか確かめる必要があります。書き換えが出来ない場合には、日本で運転免許を取得するなどの方法があります。

また、免許を書き換える際には、出身国により、また過去の運転免許の取得状況により、必要とする証明書や試験の内容が異なるので注意してください。

なお、その1・その2とも、詳しくは、

石川県運転免許センター 076-238-5901に問い合わせてください。

その3. 自動車保険には必ず加入してください。

自動車保険は、生協等で入る事が出来ます。

交通ルールを守って、安全運転で行きましょう!!!

総合日本語コース

総合日本語コースは、金沢大学で学ぶ留学生（金沢大学で教育・研究を行っている研究者も含みます。）なら、誰でも受けられる日本語プログラムです。

前期は4月から、後期は10月から始まります。初めて受講を希望する留学生は、事務局国際課に受講申し込みをして、プレシメントテストを受けてください。平成16年度秋学期は、10月6日（水）に、総合教育棟A3教室で午前10時から行われます。

このコースは角間と小立野で開講しています。角間には7レベルの普通コースと、漢字クラス、技能別クラスがあります。小立野では、初級・初中級の3レベルの普通クラスがあります。（来年度の後期からは、工学部の角間移転に伴い、小立野クラスは廃止予定となっています。）

さて、このニュースでは、教員のコース運営の取り組みと、日本語クラスで行っている文庫作りという活動についてご紹介します。

総合日本語コースは、専任教員と非常勤の教員が協力し、連絡を密に取りながら運営を行っています。どのように協力してコースを運営しているかご紹介しましょう。

1) 打合せ会

コースが始まる前には、授業担当者が全員集まり、その学期の打ち合わせをします。コースの基本方針を確認した後、受講学生の情報が交換され、それによって細かいシラバスが決定されます。

2) メーリングリスト

コース開講中の様々な連絡は、授業担当者の参加するメーリングリストによって行われます。授業中の学生の態度や進捗などが教員間で共有され、時にはシラバスの大幅な変更が加えられたりもします。

3) 反省会

コース終了後、反省会が行われ、その学期に生じた様々な問題点を洗い出し、来期に向けて改善を図ります。新たに試みられたことの結果なども話し合われます。

このように私たちは常にコース改善の努力を行っています。

留学生の皆さんからのコースへの意見、希望なども是非聞きたいと思っています。ご意見がある方は、総合日本語コース担当の峯（mmine@kenroku.kanazawa-u.ac.jp）まで、メールをください。

総合日本語コースのD（中級）、E、F（上級）クラスでは、授業で書いた作文を文集にまとめる活動を行っています。今回はDクラスの先生方に報告していただきます。

Dクラスでは、勉強した内容に関連した作文を全部で6回書きます。清書も出さなければならぬので、大変だったと思います。学生たちはみんな真面目でがんばりましたから、非常に実力がつきました。

この文集は、学生達の努力の成果を形にしようということから作られましたが、ただ思い出の品というだけではなく、作ることによる実質的な効果もあります。「勉強になるから」というよりも「文集にするから」と言うと、みんなが頑張って清書を提出します。と言っても、文集のために特別に作文を書くのではないし、少しぐらいの間違いなら思い出の一つと気楽に考えれば、学生も教師もそれほど負担に感じません。

文集にのせる作品は、学生が自分で3つの作品を選びました。オーストラリアのアンナさんとアイルランドのサイモンさんが文集係になり、表紙と前書きはアンナさんが書きました。もちろん内容もすばらしい作品ばかりです。

文集は、総合コースのEやFでもそれぞれ作っています。機会がありましたら、ご覧になってください。
Dクラス担当教師一同（早川、古本、笹原）



最後に、この文集をまとめた学生の留学の感想と、そのすばらしい表紙をお目にかけます。

さようなら、日本！

アンナ・チュー

去年10月から金沢大学に留学し、いろいろな面白い体験をし、全部楽しかったと思います。留学することは、海外へ行って外国の学校で勉強することだけではなく、異文化も勉強することです。金大の留学生は多くて、世界中から来た人に色々な国の文化について教えてもらいました。2004年春学期日本語Dクラスを取って、アメリカ、チェコ、ドイツ、インド、アイルランド、韓国、中国、タイ、オーストラリアから

の留学生と一緒に日本語を勉強し、皆で努力しましたが、それより教室の中での文化交流のほうが必要なものだったと思います。

文集の表紙を描く時、クラスメートの多様性について考えてみました。日本語より皆が自分の言葉で挨拶するほうが自然な感じを持ってると思って、そういうふうを描いてみました。皆が相違点があっても、一緒に頑張ることが留学の本質だからです。

1年間が経って、もうすぐ帰りますが、日本で作った友達、その友達から教えてもらった事を一生忘れません。

留学生センターのホームページを知っていますか？

皆さんは留学生センターのホームページを見たことがありますか？
 センターが提供するコースの紹介や時間割などが載っています。
 日本語版（下図）のほかに、ほぼ同じ内容の英語版もあります。
 ほかの留学生にもぜひ教えてあげてください。

日本語版 URL

<http://isc.ge.kanazawa-u.ac.jp>

英語版 URL

<http://isc.ge.kanazawa-u.ac.jp/eg/kuis.html>



お菓子作り



JAPAN TENT 2004 年



第18期 VOTAK ごかやま 五箇山 2004 年



海外留学フェア 2004 年



お茶碗作り



生活指導オリエンテーション